

ペンテコステ礼拝

2023年5月28日（日）

題 「呼び出された群れ」

テキスト：使徒言行録2章1～13節

皆さま、おはようございます。

今日は皆さまと共にペンテコステ礼拝を捧げることができ感謝いたします。ペンテコステは地上に聖霊が降って教会が誕生した教会の誕生日です。こどもの讚美歌の94番に「ふしぎなかぜが」という歌があります。聖霊が「ふしぎなかぜ」と理解され、聖霊の働きを思わされます。

本日の週報に掲載しています。ペンテコステのことが良く分かりますので、読んでみます。

こどもさんびか 94 番「ふしぎなかぜが」

- 1、ふしぎな風が びゅうっとふけば なんだかゆうきがわいてくる
イエスさまのおまもりが きっとあるよ。それが聖霊のはたらきです。
主イエスのめぐみは あの風とともに。
- 2、ふしぎな風が びゅうっとふけば いろんなことばの人たちも
その日から友だちにきつとなれる。それが教会のはじまりです。
世界の平和も あの風とともに。
- 3、ふしぎな風が びゅうっとふいて 心の中まで強められ神さまのこどもに
きつとなれる。それが新しい毎日です。
わたしの命も あの風とともに。

聖霊がくださった日のことを今日の聖書箇所から学びましょう。

◆聖霊が降る

「1:五旬祭の日が来て、一同が一つになって集まっていると、」とあります。この五旬祭とは、今から約 2000 年前のユダヤ教のお祭りの一つで7週の祭りとも言われ、元来は小麦の収穫を喜び祝う祭りだったようです。この時は、世界中に散らばっていた熱心なユダヤ教徒たちが、故郷のユダヤに戻って来てその中心の町エルサレムの神殿で天と地を創造された神さまを礼拝するというしきたりがあったのです。五旬祭は、その前に祝われるユダヤ教の過ぎ越しの祭りから50日たって行われます。ギリシア語では 50 は、ペンテコステと言われるのでキリスト教ではイエスさまが復活された日から50日目に神さまの聖霊がくださったことを記念するため、後にペンテコステと呼ばれるようになったのです。

ですからペンテコステとは、神の愛の力である聖霊が地上に降ってイエス・キリストの群れ、教会が誕生した日なのです。クリスマスやイースターと共に重要な日です。

聖書によればイエスさまは復活の後、40日間その姿を弟子たちに現されました。そして天に昇られたのです。その後、イエスの弟子たちは共に集まって、祈りを捧げていました。そこには弟子たちだけでなく、多くのイエスを慕う人たち男や女、子どものたちを含め120人ぐらいの人たちがいたのです。

その日に、

「2:突然、激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえ、彼らが座っ

ていた家中に響いた。」このびっくりするような事は一体何を表しているのでしょうか。

聖霊という言葉は、旧約聖書の原語のヘブライ語では、「風」とか、「息」という意味があります。つまりこの時、「激しい風が吹いて来るような音が天から聞こえていた家中に響いた。」ということは、**聖霊が激しくそこに迫って来て集まっていた人々に大きく働かれたということです。**

「3:そして、炎のような舌が分かれ分かれに現れ、一人一人の上にとどまった。」これも不思議な現象ですが、神の大いなる力はあたかも炎のようで強く、「舌が分かれ分かれに現れ」そこにいる人々に言葉が与えられていくというようにわたしには思えました。そして「一人一人の上にとどまった。」

これも大切なことのように思えます。神さまは、聖霊は集団だけではなく、一人一人を見ておられて働かれ、一人一人が大切な人として、用いられて行くのだということです。「一人一人の上にとどまった。」のです。わたしたちはそのことを新たに心で信じ、大切にしていきたいと思えます。

すると、

4:すると、一同は聖霊に満たされ、「霊」が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。

神さま、聖霊自体は、人間の肉眼には見えません。でも、信じる者たちに働きかけ心に中に住んでくださり、日常生活の中で元気のない時、悲しみに沈む時には慰めを与えてくださり、理解できなかったことを、分かるようにしてくださり、生きる力を与えてくださるのです。そして、わたしたちの背中を押してくださるかのようです。聖霊と私たちをつないでいるのは、信じる・信頼するという管のようなもので、そこを通して神さまの力が注がれるのです。そして、そこに新しい思いのことばや行動、運動が生まれます。「“霊”が語らせるままに、ほかの国々の言葉で話しました。」とあります。言葉だけではなく、様々な手段を用いて人とのつながり、誰かと関わりを持って行くのです。そこに愛の

働きが起こります。これが宣教であり、伝道なんだと思われます。しかし、決して忘れてはならないのは、「**“霊”が語らせるままに、**」ということです。ここが、教会の働きの、キリスト者の働きの気をつけるべき点です。決して自分の自慢話しなどではなく、神さまにつながって、人とつながって行くのです。つまり、「神を愛し、人を愛す。」というイエスさまの教えの道を歩むのです。そこにきっと苦しい中にも憩いの泉が湧き、喜びの花が咲くことでしょう。続きの聖書箇所を読みます。

5:さて、エルサレムには天下のあらゆる国から帰って来た、信心深いユダヤ人が住んでいたが、

6:この物音に大勢の人が集まって来た。そして、だれもかれも、自分の故郷の言葉が話されているのを聞いて、あっけにとられてしまった。

7:人々は驚き怪しんで言った。「話をしているこの人たちは、皆ガラヤの人ではないか。

8:どうしてわたしたちは、めいめいが生まれた故郷の言葉を聞くのだろうか。

9:わたしたちの中には、パルティア、メディア、エラムからの者がおり、また、メソポタミア、ユダヤ、カパドキア、ポントス、アジア、

10:フリギア、パンフィリア、エジプト、キレネに接するリビア地方などに住む者もいる。また、ローマから来て滞在中の者、

11:ユダヤ人もいれば、ユダヤ教への改宗者もおり、クレタ、アラビアから来た者もいるのに、**彼らがわたしたちの言葉で神の偉大な業を語っているのを聞こうとは。**」とあります。9 節、10 節は舌を噛みそうになります。

2000 年前の当時の地図では、ローマ帝国の支配地域から今日で言えば、イランやイラク、エジプト、スーダン、ローマなどからエルサレムの町に、祭りを祝うためにユダヤ人たちやユダヤ人でなくても割礼を受けた改宗者たちがやって来ていたのです。弟子たちは、神の力を受けて、神の偉大な業を、つまりイエス・キリストの十字架と復活の出来事を勇気を持って大胆に語っていたのです。驚くべきことは、彼らの語ることばは、そこにいた人々に伝わったのです。聖霊の働きは、伝える働きでもあるのです。ちなみにガラテヤの信徒への手紙 5 章 22 節 (P, 350) には御霊の実として、愛・喜び・そして平和などが記されています。

12:人々は皆驚き、とまどい、「いったい、これはどういうことなのか」と互いに言った。

13:しかし、「あの人たちは、新しいぶどう酒に酔っているのだ」と言
って、あざける者もいた。

この時、イエスの弟子たちに対して甘い新しいぶどう酒で酔っぱらっている
とのあざけりや非難も起こったのです。しかし、神さまは伝道が困難な中にも、
助け主とも言われる聖霊を送り、イエスを主と信じる人たちを起こされ、呼び
出された群れとしてご自身の救いの業のためにいつの時代にも用いて来られ
たのです。

それは今日においても続いていることなので、起こり続けることなのです。わ
たしたちも愛なる神さまに呼び出された群れとして、心新たに今日から新しい
歩みを起こして行きたいと願います。

皆様の上に主の平安をお祈りいたします。共に黙想しましょう。